

シケイロス、タマヨ、フリーダ・カーロらの絵画が一点ずつ出品された〔7〕。そして9月10日から10月20日まで、東京国立博物館で大規模な「メキシコ美術展」が開催される。同展カタログによれば展覧会は3部構成であった。第1部「古代美術」は紀元前1500年頃からスペインに征服される1521年までの約3000年の美術を扱っており、古拙文明の土偶やマヤ文明の石像や陶器、アステカ文明の仮面などを含んでいる。第2部「現代美術」は、スペイン植民地時代（1521年－1821年）の絵画も含んでいるが、ほとんどは独立（1821年）後の作品、とりわけ革命（1910年）後の作品が多数を占めている。オロスコ、リベラ、シケイロス、タマヨの4巨匠については、それぞれ10点以上の作品が出品されており、別格の扱いとなっている。また、民衆版画家ホセ・ガダルベ・ボサダの版画が18点出品されているほか、フリーダ・カーロとマリア・イスキエルド、野外美術学校で北川民次の指導を受けたアマドール・ルーゴ、マヌエル・エチャウリ、フェリシアーノ・ペーニヤの作品も含まれている。第3部「民俗芸術」はスペイン征服後から現代にまで伝わる民芸品を扱っており、陶器、漆器、金属製品、染織品のほか、玩具、仮面などを含んでいる。カタログのリストから数字を拾うと、出品作品は第1部「古代美術」で175点、第2部「現代美術」で426点、第3部「民俗芸術」で581点に及んでおり、総数が1000点を優に超える驚くべき規模の展覧会であった〔8〕。

『母と子タイムス』（1955年9月10日）の取材に対し、芥川紗織は「フランス、フランスとそのあとばかり追っているのには反対です。メキシコは日本と同じに近代絵画の伝統がないんですが、民族的な絵で、それを学びたいと思います」、「メキシコではビル一つ建てば必ず壁画を描くんです。日本にはそれが

展覧会の舞台裏番外編

再びキャプションについて

今から6年ほど前に、この欄でキャプションの話題を取り上げたことがあります。近年キャプションや解説パネルなどの、展示の補助的な手段に対する関心がかなり高まってきていることをご紹介したものです。今回このキャプションについて、再度取り上げたいのですが、それは外国語表記について考えてみたいと思うからです。作家名、作品名、制作年など、作品の基本情報を鑑賞者に伝える媒体としてのキャプションですが、近年は和英の二か国語で表記されることが多くなりました。二か国語での表記そのものはかなり以前から多くの美術館で実践されていたのですが、かつては英語以外の言語と日本語との併記がかなりありました。例えばイタリア・ルネサンスの展覧会であれば、日伊の二か国語、フランス印象派であれば日仏の二か国語といった具合に、作品が誕生した母国の言語と日本語とを併記する方法です。当たり前と言えば当たり前の方法なのですが、これが近年どんどん英語に一本化されるようになっていきます。取り上げる対象がドイツ、スペイン、ロシア、あるいは韓国であっても、表記する際はすべて和英の二か国語という例が圧倒的に多くなっています。なぜ日本語以外でも表記するのかと言えば、海外からの来館者への配慮という意味が強く、であれば圧倒的

ないから発展していかないのではないのでしょうか」と答えている。この取材を受けたのは「メキシコ美術展」を見る前であろう。「メキシコ美術展」を見て、芥川は次のような感想を述べている。

前にタマヨの絵を美術雑誌の原色版で見てそのまか不思議な色彩にひどく惹かれました。それ以来私は何が何でもタマヨのファンになってしまいました。[略] 今度のメキシコ展で民芸品の部屋に足をふみ入ると私は“これだ。タマヨの色は”と思いました。民芸品の切り紙も人形も皆タマヨのあの魅力的な紫色や桃色なものでした。これはメキシコの現代絵画のすべてに云えることなのですが、何千年も昔の土偶の形態も民芸品のネンドの人形の色も皆現代絵画の中にそのまま生きていて彼等の激しい力と情熱を語る強力な言葉になって居るのです。[略] 私はメキシコの作家達が大きなビルの外側の巨大な壁面に思い切り腕をふるって壁画を描いていることを心からうらやましく思います。国と国民の生活と作家がこんなに密接につながっている国を素晴らしいと思いました。日本の現代絵画は日本の国や日本の多くの人々とは何の関係もないところで描かれているということが、私には間違ったことに思えるのです。〔9〕

1955年10月の村松画廊での個展、つづいて12月から翌年1月の「今日の新人・1955年展」（神奈川県立近代美術館）で、それまで「女」を主題にしてきた芥川が日本の神話や民話に取材した作品を発表した〔10〕。神話や民話への関心は以前からあったようだが、「メキシコ美術展」でタマヨやシケイロスの作品を

公約数である英語での表記が当然ということになります。昨年当館で開催した「ランス美術館展」は、和仏の二か国語表記だったのですが、英語にしてほしかったという来館者からのご意見が複数寄せられたと報告がありました。また、日本語のみでの表記をした展覧会に対しても同様の意見がいくつか寄せられたことがあり、思った以上に海外からの来館者が増えていることを実感させられています。このような状況は、美術館に限ったことではなく、また日本に限ったことでもなく、世界中で急速に進行しつつあるグローバル化の現れの一つなのでしょう。英語さえある程度マスターすれば、どんな国や地域の人たちとも意思の疎通が図れるというのは、大変便利なことには違いありません。

しかし、一方で本当にそれでいいのかという漠然とした疑問を抱く方も少なくないのではないのでしょうか。イタリア語やフランス語で作品名を表記するのは、その作品を生んだ国の文化に対する敬意の表明でもあり、便利だからといって英語に置き換えてそれで済むことなのか、という疑問です。利便性を追求することによって失われてしまうもの、最大公約数を目指すことによって消えてしまう微妙な差異。本来美術というものは、経済性や効率性とは無縁のものであり、一見無駄なもの、訳のわからないものの中に面白さや喜びを見出すものはずです。それが個性であり文化であるはずなのですが、現在のあらゆる流れは、グローバル化の名のもとに均一化へと向かいつつあります。たかがキャプション、されどキャプション。小さなものの中にも美術館が目指すべき方向の指針がありそうです。（F）

ンヌの《赤いチョッキの少年》やルノワールの《イレーヌ・カーン・ダンヴェール嬢（可愛いイレーヌ）》、ファン・ゴッホの《日没を背に種まく人》などなど、美術ファン、とりわけ印象派好きの方なら、まさに垂涎の傑作ばかりがずらりと並んでいます。スイス、チューリヒの実業家、エミール・ビュールレがこのコレクションを作り上げたのは1930年代後半から亡くなる1956年までの20年ほどの間。この短い期間に彼は600点余りのコレクションを作り上げましたが、注目すべきはその数よりも質です。印象派を中心とするこの

実際に見ることによって、芥川は主題ないしは造形において、国民のアイデンティティに関与することの重要性や必然性への確信を深めたであろう。特にタマヨは、スペイン征服以前の古代彫刻や民俗芸術から形や色彩のヒントを得ており、メキシコの造形的な伝統を現代絵画の中に息づかせていた。

古いもの、プリミティブなものは何でも大好きで、よく博物館に土偶や仏像を見に出かけます。又ピカソやシケイロスや宗達や北斎の仕事に、それぞれひどく感動して、そんな仕事がしたいと考えています。〔11〕

1957年1月の村松画廊の個展で、芥川はイザナギノミコトの物語を主題とし、「村松画廊の壁の寸法をはかり、壁一杯に、きつちり制作」〔12〕した《古事記より》（世田谷美術館蔵）を発表、また同年3月には、アマテラスオオミカミとスサノオノミコトの争いを主題とした、別の《古事記より》（名古屋市美術館蔵）を向井良吉との二人展（風月堂画廊）で発表している〔13〕。芥川は「今まで描きたいと熱望しておりました絵巻物の形式で、思い切り大作を描いてみたいという願望を達し、その点では一応満足致しました」〔14〕と述べている。針生一郎や佐々木基一は、1955年に「メキシコ美術展」が開催された当初から、その安易な模倣が日本の画壇にはびこることを懸念しており、メキシコはメキシコ独自の古い文化・伝統を汲み取って現代に継承している点を強調していた〔15〕。芥川はそうした批判を真摯に受け止めていたであろう。メキシコの画家たちが壁画の主題をアステカの神話やスペイン侵略から独立、革命に至る歴史に求めたように、芥川は日本人が表現すべき主題として古事記のような神話を選択し、形式においても壁画に匹敵するスケールを単なるタブローの拡大によって得ようとするのではなく、右から左へと場面が連

感想ノートから

ランス美術館展

2017年10月7日(土)～12月3日(日)

フランス、シャンパーニュ地方の町ランスは、人口20万人ほどの小さな町ですが、歴代のフランス国王がこの町の大聖堂で戴冠式を行ったことで知られる、歴史と伝統を誇る古都です。名古屋市美術館とランス美術館は2013年に友好提携の覚え書を交わし、2016年春にはその最初の交流事業として「藤田嗣治展」を開催しましたが、二つ目の企画展として開催されたのが「ランス美術館展」です。会期中の10月20日にはランス市長をお迎えして、名古屋市とランス市との間で姉妹都市提携の調印式も行われ、美術館の枠を超えて、今後一層幅広い交流を行っていくことも確認されました。こういった事情もあり、展覧会には大勢の来館者の方がお見えになりました。71点の出品作の内、最も注目を集めたのは《マラーの死》で、感想ノートにもこの作品に触れたものが圧倒的でした。「すごく感動しました。！《マラーの死》は強烈でしたね」[《マラーの死》は思っていたより強烈だった。ずっと見てみたかった作品だったので、感動もひとしおだった」]「パンフレットの《マラーの死》に一目ぼれして来ました。美しかった」。ポスターやチラシのデザインに使用したこともあって《マラーの死》への関心がとても強かったようですが、それ以前にも歴史

統する横長の絵巻物に倣って、日本美術の伝統を強く意識したのであった〔16〕。（nori）

- [[]
- 註
- []]
- 〔1〕 浜田知明、河原温、山中春雄、池田龍雄、木内岬、吉仲太造、(司会) 針生一郎「座談会 新しい人間像にむかって」『美術批評』1955年7月号、p. 57。

〔2〕 先行研究に山田諭「メキシコ・ルネサンスと日本－1950年代の動向を中心として－」（『メキシコ・ルネサンス展 オロスコ・リベラ・シケイロス』展覧会カタログ、名古屋市美術館、1989年、pp. 234-235）、山田諭「ルフィーノ・タマヨと日本」（『ルフィーノ・タマヨ展』展覧会カタログ、名古屋市美術館、1993年、pp. 118-121）、仲野泰生「岡本太郎・メキシコへのまなざし」（『岡本太郎とメキシコー熱いまなざし』展覧会カタログ、川崎市岡本太郎美術館、2002年、pp. 60-62）がある。

〔3〕 土方定一「メキシコの現代美術 近代美術館のメキシコ美術展」『みつゑ』1952年8月号、pp. 53-59。また、福沢一郎はバリから「メキシコ美術展」の素晴らしさを『美術批評』誌に報告している。「ニュース：メキシコ美術展、二十世紀傑作展など」『美術批評』1952年7月号、p. 45。

〔4〕 北川民次「新しい神様－壁画とタブローに就て－」『美術批評』1953年2月号、pp. 22-26。

〔5〕 海老原喜之助、富永惣一「対談 庶民芸術ということから」『美術批評』1953年3月号、p. 19。

〔6〕 福沢一郎、植村鷹千代、瀬木慎一「座談会 メキシコの現代美術－位置とその特殊性－」『美術批評』1954年7月号、p. 15。

〔7〕 『美術手帖』1955年7月号（第三回日本美術展特集）。

〔8〕 『メキシコ美術展』展覧会カタログ、東京国立博物館、1955年。

〔9〕 「アンケート メキシコ美術展をみて 新進作家27氏の意見」『美術批評』1955年10月号、p. 39。

〔10〕 宇佐美英治「展覧会評 芥川紗織個展（10・13-18 村松画廊）」『美術批評』1955年11月号、p. 58。

〔11〕 芥川紗織「絵が出来上がるまで」『美術手帖』1956年3月号、pp. 60-61。

〔12〕 『芥川紗織展』展覧会カタログ、横須賀美術館、一宮市三岸節子記念美術館、2009年、pp. 100-101より引用。原典は『新鋭作家展出品目録』、富山市郷土博物館、1957年。

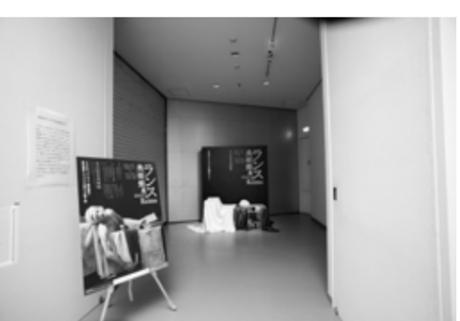
〔13〕 瀬木慎一「画筆に生きた女のドラマ」『芸術生活』1973年9月号、p. 19。

〔14〕 前出「芥川紗織展」展覧会カタログ、p. 100。

〔15〕 滝口修造、花田清輝、佐々木基一、末松正樹、安部公房、針生一郎「座談会 メキシコ美術展をめぐって」『美術批評』1955年10月号、p. 10。

〔16〕 1950年代は、岡本太郎やイサム・ノグチらの影響もあって、一部の前衛芸術家たちの中で伝統への意識が高まっていたという背景もある。アレキサンドラ・モンロー「環：モダニズムと伝統」『戦後日本の前衛美術』展覧会カタログ、横浜美術館、1994年、pp. 53-55。

の教科書などでこの絵をご存知だった方が少なくないようでした。会場の出口には昨年流行語にもなった「インスタ映え」を狙って「なりきりマラー」のコーナーも設けましたが、こちらも好評。「まさかマラーになれるなんて… やっちゃった」[最後のなりきり体験、やってしまいました。それが意外と一番楽しかったかもしれません（笑）]「マラーの死をやりたかったけど、恥ずかしくてできなかった。子供になりたい。無邪気さが欲しい」。人目など気にせず、今回はどうぞ挑戦してください。こういうのは楽しんだもの勝ちです。次いで人気を集めたのが藤田嗣治。「藤田の卓越したデッサン力。木炭画の下絵に圧倒されました」[藤田画伯の絵に感動しました。日本にこんな凄い人がいたんですね]。姉妹提携のきっかけにもなった藤田の作品。名古屋の皆さん、どうぞ今度はランスを訪問して、大聖堂や藤田チャペルを体験してみてください。（F）



「なりきりマラー」のコーナー

公開されるのは、今回が最後の機会になるでしょう。このコレクション、1990年に一度だけ日本で公開されたことがあります。その時とは作品がかなり変わっています。今回出品される64点の作品のほぼ半数は日本初公開です。その中には4メートルを超えるモネ最晩年の《睡蓮》の大作も含まれていますが、この作品は、日本はおろか、スイス国外に出るのも初めてという幻の傑作です。これぞ名作、これぞ印象派という珠玉の作品の数々と出会うこの展覧会。どうぞお見逃しなく。（F）

展覧会 現在進行形

ビュールレ・コレクション展

2018年7月28日(土)～9月24日(月・休)

ビュールレ・コレクションと聞いても、すぐにピンとくる方はあまり多くないかもしれません。しかし、作品を見れば「え！ これも、あれも、ビュールレ・コレクションだったのか」と驚かれる方は少なくないはず。それほどこのコレクションは名作ぞろい。セザ

郷土の作家たち

大澤 鉦一郎(おおさわ せいいちろう/1893-1973)

大澤鉦一郎は1893年(明治26)に名古屋市に生まれた。愛知県立第一中学校(現・愛知県立旭丘高等学校)に入学。水彩画に熱中し、画家を目指すようになり、1912年、東京高等工業高校(現・東京工業大学)工業図案科に入学した。そこで、図案科長だった松岡寿からデッサンの指導を受け、観察力、デッサン力を身に着けた。しかし、1914年初めに病気のため高等工業を中退し、知多で療養。快復後も在住し、美術雑誌『現代の洋画』や文芸雑誌『白樺』に掲載されたゴッホ、セザンヌら後期印象派(ポスト印象派)の画家やロダンの作品に触発されながら、独学で画家の道を歩み続けた。

1917年2月、岸田劉生、木村荘八らによる草土社名古屋展が開催され、大澤は開催期間の3日間を通い詰め、作品を熟覧している。そして、その年に地元「美を愛する」若い画家たち山田睦三郎、宮脇晴らと愛美社を結成した。大澤は、対象物を丹念に観察し、細密な写実表現による作品を描いていく。1919年には、愛美社油絵素描展覧会を開催し、『田舎の少年』『りんご三つ』(いずれも名古屋市

美術館所蔵)、《自画像》《大曾根風景》(いずれも愛知県美術館所蔵)を含む19点を出品した。1928年には春陽会展に初入選し、以後出品し続けた。その後、細密な写実の作品は減っていくが、子どもや身近にいる人々の姿や日常生活をモチーフに、丹念な観察に基づき描く姿勢は失わなかった。1950年代以降は、輪郭線が生み出すシンプルな画面構成の作品へと変化を見せる。画家の徹底した観察がとらえたモチーフの本質が、柔らかな色づかいで表現されている。

画家として活躍する一方、常滑町立常滑実業女学校(現・愛知県立常滑高等学校)、愛知県立横須賀高等学校(現・愛知県立横須賀高等学校)に美術科講師として勤め、美術教育にも貢献した。1973年(昭和48)1月、自宅で倒れ、帰らぬ人となった。(I.)



大澤鉦一郎《紫陽花と少女》1971年 名古屋市美術館蔵

メラのピントに合わせ、そこには色づいて世界が見える、そのようなイメージを抱きました。(Chibaさん、21歳)

「赤い四角が周囲の物をよせつけない感じ。恐怖?心の壁?偏見?何か分からないが、内と外は別の世界、決して交わることがない。赤は暖かな色なのに少し不安になる。子供はそんなふうには思わないだろうか?それとも大人だから、そんなふうを感じるのだろうか…」(匿名、?歳)

「あかいしかくの中にだけ、色がついていて、実際に見るとうきでているように見える。他のところにこの“あかいしかく”がうごいたら、いったい灰色はどんな色になるのだろうか?とわくわくする絵です。あと一緒に何か音がきこえてきそうな…パクッ、ニョロニョロ、ぐにゅーん。」(Sakiさん、30代)

「私には風呂場のタイルに見えました。タイルの壁にタオル掛けと鏡ないしモニターがついているように見えました。何でも自分の生活圏のなかのモノに置き換えて解釈してしまう、悪いクセです。」(クラールさん、22歳)

「人がバンザイをしている、ささやかな幸せを手に入れた絵にみえます。ぬり絵の完成も、またささやかな日常の幸せのひとつのようです。」(さくらさん、35歳)

「所々に散らばるモンスター(と自分は呼んでいます。灰色の物体)たちが軽やかで、動く様子がすぐに思い浮かべられた。奴らはまず目なんか無視して動き回るが、赤い四角の中には入れなくて、もがいているようでもある。いや、奴らが入れないように、赤い四角で囲った空間ができたのかもしれないのだ。どこか抑圧された自由…。俺は考え過ぎている。『感じる』ことは重要だ。」(やきそばさん、21歳)

「題名からしても、見る人の想像力をかきたてますね。ひねくれた感想として…青いしかくや黄色いしかくを想像し、『青いしかくのなかはうごく』、『黄色いしかくのなかは点滅する』など、自分で作って楽しめました。線や形に動きが見えたので、上記のような想像をしてしまったのかもしれない。」(みかんさん、28歳)

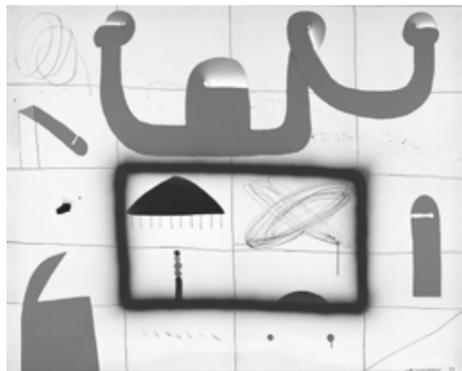
「いい人っぽい絵です。難しいことを言うのがはずかしくなるような絵です。それがこの絵の価値なんだろうと思います。この建物にすこしにしています。べこんと折れたのがおもしろい。」(K.Sさん、54歳)

「一服の清涼剤のように心がほぐれて、すごく良かった。ずっと真剣な仕事をされてきたであろう作家さん(周りのしつらえや技術が高い点から察しているだけですが…)だろうに、人間味のようなものが窺えてとても良かったです。質の高いもの、選ばれし方々の選ばれし作品…という印象だけだと、アートの意義とか生活に本当にいるの…?と疲れてしまうことがあるので、元永さんの作品はとて救われました。」(匿名、?歳)

どっがおもしろい?!

元永定正《あかいしかくのなかはいろぬり》1981年

アクリル・キャンヴァス 182.0×227.0cm



今回ご紹介するのは、元永定正《あかいしかくのなかはいろぬり》(1981年)へ寄せられた来館者からのコメントです。三重県出身の元永(1922-2011)は、自己流で制作を続けていたところを吉原治良に認められ、1955年から具体美術協会に参加し、日本画のたらし込み技法に着想を得た抽象絵画やオブジェ、パフォーマンスで頭角を現しました。1966年ニューヨークに招聘されたのをきっかけにエアブラシを使い始め、本作に見られるようなユーモラスな形や色が登場するようになります。当館には《作品》(1961年)と併せ2点が収蔵されていますが、コメントにもあるように、元永が手がけた絵本『もこもこ』や『ころころころ』、『もけらもけら』などに見られる形との類似から、特に懐かしさや親近感を覚えるのかもしれませんが。(3)

「パソコンのペイントツールで描いたかのような絵が、36年前に描かれていること。」(もろみさん、23歳)

「赤の色がきれい。もけらもけらみたい。ころころみたい。」(静花さん、10歳)

「ぼくは、だれかの頭の中のゆめのえだと思いました。」(かずきさん、?歳)

「昔見た絵本を思い出すなあ、と思っていたら同じ作者でした。理解しがたいのに嫌な感じが何一つせず、気の抜ける雰囲気が好きです。」(honoさん、20歳)

「『あかいしかくのなか』を『いろぬり』するように、と自分で自分に指示して描いているように感じました。楽しそう。子どものあそびっぽく見えるのに、書いているサインはバリバリ大人が書くそれだったので、なんかニクいなあと思った。」(海月さん、20歳)

「ばあっ、という擬音が似合い、あっけらかんとした雰囲気が魅力的。」(春待鮎子さん、18歳)

「格子と赤枠からカメラを連想しました。カ

真島 直子(まじま なおこ/1944-)

真島直子は、名古屋においてシュルレアリスムを土台にして独自の抽象表現を試みた作家である真島建三(まじまけんぞう/1916-1994)の第一子長女として生まれた。愛知県立旭丘高等学校美術科を経て東京藝術大学美術学部油画科を卒業している。大学進学のために上京して以降は東京を主な拠点として作品の制作と発表を行っている。

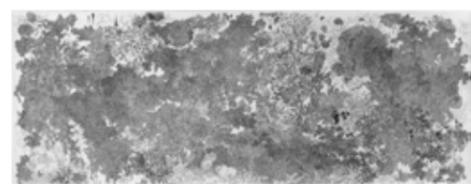
絵画作品に加えてオブジェやインスタレーションによる立体作品の制作を初期から行っており、それらは主題と形式や素材について既成概念にとらわれない柔軟な発想による個性的な創作となっている。1990年から作品名に「地ごく楽」が用いられるようになる。「地ごく楽」は、「地獄」と「極楽」を重ね合わせて一語にした作家の造語で、作家の創作における境涯を表すとともに、この世にある私たちの「生」の状況を表す。2000年頃からは紙やキャンヴァスに鉛筆で細密描写を行う「鉛筆画」の制作が始められており、「地ごく楽」と「鉛筆画」はともに作家の代名詞ともいえるものとなっている。

真島が広く知られるようになったのは絵画と立体からなる一連の「地ごく楽」作品によ

てであり、グランプリを受賞した2002年の第10回バンガラデッシュ・アジア・ビエンナーレに出品した鉛筆画4点もこのシリーズに含まれる。

作家は2010年代に入って以降、久しく制作を止めていた油彩画の制作に再び取り組み始めている。「脳内麻薬」と題されたそれらの作品は、立体作品と同様に豊かな色彩を持ち、脳や腸などの図柄を伴いながら有機的な存在としての人間の来し方行く末を見通すような画面となっている。

2018年には名古屋市美術館と足利市立美術館で公立美術館では初となる大規模な個展が開催される。準備の過程で、本名の表記である「真島」ではなく、作家名としては「真島」とすることが明らかにされた。名古屋市美術館においてはこれまで「真島」としてきたが、これにより以後は「真島」を用いる。(み。)



真島直子《密林にて》2009年 名古屋市美術館蔵

イベントレビュー

サイエンス&アートフェスティバル アート大会

2017年11月3日(金・祝)、4日(土)

11月3日、4日の二日間、白川公園一帯を会場としたイベント「サイエンス&アートフェスティバル」が開催されました。美術館では「アート大会」と称し、作家の山口百子さんをお迎えしてのイベントを行いました。山口さんの提案で三つのプログラムが用意され、白川公園を訪れた方々が一日楽しんで帰られました。

まず、メインとなったプログラムは、「はじけるパウダーで大きな地上絵をかこう!」というもので、5色のパウダーを付けたスポンジをポンと飛ばして囲いの中に落下させ、それで付いた色が絵のようになるという仕組み。スポンジは渡された竿でそれぞれが釣りをするかのように回収します。このプログラムは、特に子どもたちがとても楽しんでいました。スポンジを飛ばすのも面白いのですが、それを回収する時のゲーム感覚も、子どもたちをわくわくさせたようです。出来上がった地上絵は・・・という、正直、期待したような出来栄とはなりませんでした。皆さんに楽しんでいただけたことは、とてもよかったです。

さて、もうひとつのプログラムは、「魔法ペンとミラーカードでキラキラ・サンクガーデン!」というもの。暗闇で光る特別なペンを渡された子どもたちは、ミラーカード

に思い思いの絵を描き、美術館ロビーの一角に設えられた暗室に入って、光る絵を見ることができました。出来上がった作品は、美術館のサンガーデンの植え込みの中に飾りました。

そして、「ラインをたどって、なぞをところ!」というプログラムは、お馴染みのスタンブラリー。美術館の周りがある黒いラインをたどって、ポイントごとに設置されたなぞを解きます。

アート大会では、沢山の方に美術館や白川公園を訪れていただきました。子どもたちも、美術館のイベントに参加して絵を描いて楽しむという経験を、楽しいひとときを過ごすと同時に、もしかすると人生の中で美術というものと少し関わりを持つきっかけが出来たかもしれません。

美術館としてはこのアート大会は一年に一回のイベントということで、毎年どんなプログラムにするか頭をひねっておりますが、毎回新しい発見もあり、反省もあり、次の年に向けていろいろと思うところもあります。いずれにせよ、皆様に少しでも美術館を楽しんでいただけるように楽しいイベントを開催出来ればと考えています。このイベントをきっかけに、皆様に美術館や白川公園を訪れていただければ大変嬉しく思います。(AN)



イベントガイド

■特別展

名古屋市美術館開館30周年記念

モネ それからの100年

会期: 2018年4月25日(水)~7月1日(日)

料金: 一般1,400円、高大生1,000円、中学生以下無料

「睡蓮」で知られる印象派の巨匠、モネの芸術の深みと広がり、彼の精神を受け継ぐ現代美術の作家たちと比較することにより明らかにしていきます。モネの作品に加え、ウォーホル、福田美蘭といった現代美術を代表する国内外の作家の作品約90点を展示します。

【関連催事】

●記念講演会

日時: 5月20日(日) 午後2時から

演題: 「モネの色彩と光」

講師: 松本陽子(画家・本展出品作家)

●作品解説会

①日時: 5月12日(土) 午後2時~3時30分

②日時: 6月17日(日) 午後2時~3時30分

講師: 深谷克典(名古屋市美術館副館長)

※記念講演会・作品解説会いずれも会場は2

階講堂、入場無料(聴講には本展チケット(観覧済み半券可)が必要)、先着180名

■常設展

名品コレクション展I(前期)

会期: 4月25日(水)~7月1日(日)

名古屋市美術館のコレクションから次のテーマに沿って作品を紹介いたします。

エコール・ド・パリ: フランスで描く

メキシコ・ルネサンス: ガイコツたちの饗宴

一ボサダの芸術

現代の美術: 収集熱一集めて、分類して、見せる

郷土の美術: 名古屋のパフォーマンスー追悼

岩田信市と岸本清子

■コレクション解析学

日時: 5月27日(日) 午後2時から

演題: 「マリオンネット、メキシコに行く」

会場は2階講堂、無料、先着180名

作品: ティナ・モドッティ《操り人形としてのルネ・ダルノンクール》1929年

講師: 竹葉丈(名古屋市美術館学芸員)

休館日は月曜日(祝休日の場合は翌平日、ただし4月30日は開館)、4月17日(火)~4月24日(火)、7月3日(火)~7月27日(金)です。詳しくは、美術館ウェブサイト <http://www.art-museum.city.nagoya.jp/> をご覧ください。

(5)

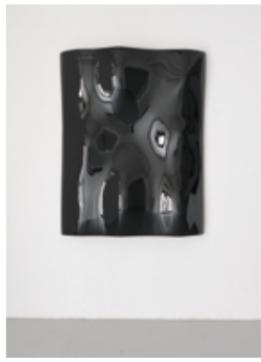
展評

2017年12月9日(土)～2018年1月25日(木)
ケンジタキギャラリー

田中信行展

1959年生まれの田中信行は漆を素材にした立体作品を制作しています。麻布や和紙を漆で貼り重ねたり、木粉を漆に混ぜて固めるといった手法で形を作り出す乾漆という技法で生み出された作品は、漆を用いた工芸作品のイメージを超えるものとして美術の分野でも注目され、高い評価を得ています。東京に生まれ、現在は金沢に在住し、金沢や東京などで多くの展覧会に出品しています。愛知では2013年に豊田市美術館で開催された「黒田辰秋・田中信行一漆という力」展が記憶に新しいところです。

作家は、生命の根源や生成に関わる原初的な記憶を呼び起こす力を漆に感じており、漆の質感から触発された波打ちたわむ表面を持った作品を制作しています。漆は、塗ることと研ぐことを基本の技法としています。塗



田中信行《Imaginary Skin II》2016年
写真提供：ケンジタキギャラリー

ることで得られる質感と研ぐことによって得られる質感には違いがあり、平滑に研ぎ出されることによって光沢を宿す表面には漆に固有のなまめかしさがもたらされ、極薄の被膜というような皮膚感をも見るものを感じさせます。実在する何ものかの形を再現するのではなく、また実用に供するための器物としてもなく形作られた田中の作品は、それを支える厚みを内在させつつ表面において何もの

の中ではすでにLEDの看板が主流をなしているネオン管は消えつつあるが、そのネオン管に西洋絵画の在り方を象徴する窓や、歴史的な芸術運動の名前を象り、これまでの美術の「物語」の終焉をうたっているようにも思われる。フロッピーディスクなど「消えゆく物たち」(タイトルは「最初の物体」となっている。)が立てられて描かれた、2Fに展示されていた油彩もこの作品シリーズに呼応しているのだろうか。

また興味深かったのは、わざとどんくさそうなむっちりとした姿で(びっちりとしたTシャツがそれをさらに強調している)、「Make America Great Again」という文字が書かれた帽子を被った女の子が描かれたドローイングのシリーズである。情報をしっかり吟味できずに流されていく、わたしたち大衆の姿を象徴するようで、ほのぼのとした外見の女の子が、平凡なまま何か大変なことをしでかそうとしているようでもあり、どこか空恐ろしく感じられるものであった。(hina)



会場風景 ©Nami Yokoyama 写真提供：ケンジタキギャラリー

く、彼女が旅行先で体験したこと、食べたものの、見たものを、ごく個人的な好みによってエッセイにしたようなものだ。しかし、それぞれの描写から彼女の静かな感動が伝わって来て、ふつうの「暮らし」というものを大切に作る姿勢に惹きつけられる。

目次を見ると、「暮らしの中のデザイン」とか「カゴを編む本」、「スウェーデンのテキスタイル」、「アルテックのブルーの椅子とアフリカのカゴ」、「Corbusierの小さな家」といった項目のあたりが、デザインや建築、そしてテキスタイルやカゴなどのクラフト系のものへの関心の強さを物語る。しかし、どの項目に関しても、実にさらりと肩の力の抜けたエッセイとして記されており、難しく芸術を語るようなところは感じられない。

このような本を読むと、私たちの暮らしと芸術的なものとの関係について考えさせられる。生活とかけ離れた芸術もあり、それはそれで鑑賞するのは楽しいものであるが、私たちにとって身近な生活の中にある芸術や、暮らしそのものが芸術であるということも、また、大切なことだと感じる。

この本は「美術書」のジャンルには入れがたい本かと思うのだが、こういった本のページを気楽にめくるのは心楽しいものであるし、それもひとつの芸術的な体験かもしれないと考えたりもする。生活や芸術を、時には気楽にのびのびと楽しみたいものだと思う。(AN)

かを表出しています。その何ものかは、作家が漆に感じた生命の根源や生成に関わる原初的な記憶に相似するものなのでしょう。

この度の展示では「Imaginary Skin (イメージの皮膚)」と題された作品が含まれていました。研かれた黒漆の表面は、相対する外界をその曲面にあわせて幾重にも反射し、空間

展評

2018年1月4日(木)～3月4日(日)
三重県立美術館

モダニストの日本ー石元泰博「桂」の系譜

本展覧会は、1960年に出版された写真集『桂 日本建築に於ける伝統と創造』を“到達点”として、西洋近代の美意識(モダニズム)によって、日本の伝統美を発見、再評価した摸索とその過程を作品と文献資料によって辿る。

建築家の岸田日出刀やブルーノ・タウトによって再評価された「日本の美」は、画家の長谷川三郎、彫刻家のイサム・ノグチ、デザイナーの剣持勇の制作等、桂離宮を巡るモダニストの表象の連鎖として提示され、その成果がヴァルター・グロピウスと丹下健三、写真家の石元泰博による写真集『桂』に結実したことを展覧会は教えてくれる。

桂離宮の発見にモダニズムの美意識を探る本展覧会の“起点”に立つ写真家・石元泰博(1921-2012)には、もう一つの「系譜」がある。石元が学んだシカゴの〈インスティテュート・オブ・デザイン〉とは、ラースロ・モホイ=ナジ(1895-1946)による〈ニュー・パウハウス〉をその前身とし、1939年に〈スクール・オブ・デザイン〉として再建されたものであった。この年、詩人でシュルレアリスムの紹介者であった瀧口修造(1903-1979)は、シカゴのモホイ=ナジの許に日本の写真家たちの作品を送っている。同年4月に〈写真造型研究会〉を結成した瀧口が唱道した「造型

のみならず時間をも重ねながら伸縮させているかのように見えました。作家の意図するところではないはずですが、想像上の皮膚である透明な漆の層の表面に捉えられた映像は、眼球に映じた写像や絵画について思いを到らせました。造形の美しさはもとより、気づきと思索を誘うもののある展示でした。(み。)

写真」は、対象のフォルムに注目し、画面を白と黒の構図として見せる抽象表現を展開した。写真の機能と時勢を意識した写真家たちは、やがて民俗学に近づき、農民家屋の土壁に「モンドリアンを見る」ことになる。

モホイ=ナジの死の翌年(1947年)に出版された『Vision in Motion』には果たして、日本から送られた作品が掲載されていた。同書を瀧口は、日比谷にあったGHQの図書館で閲覧しているが、その後1954年に石元の日本ではじめての個展を企画した瀧口は、彼の作品に戦前の「造型写真」の系譜を見たのだろうか?モホイ=ナジと石元の直接的な出会いはなかったようだが、モホイ=ナジをシカゴへと招いた人物がグロピウスであったことを考えると、写真集『桂』は、正しく“モダニスト”たちの出会いとすれ違いの末に結実した“必然”であったような気がする。[J.T.]



石元泰博《桂離宮 新御殿外観南面部分》
1981, 82年 国際交流基金蔵
©Kochi Prefecture, Ishimoto Yasuhiro Photo Center

CULTURE, MOVIE, DRAMA & MUSIC

映画『リメンバー・ミー』 同時上映『アナと雪の女王/家族の思い出』 公開中 上映時間2時間07分

現在大ヒット公開中のディズニー/ピクサーによる映画『リメンバー・ミー』は、メキシコの〈死者の日〉をモチーフに、ミュージシャンを目指す少年が、自らの先祖を訪ねる冒険を描きます。これまでメキシコと言えば、「西部劇」だったような印象がありますが、本作品では、メキシコの人々の生活や伝統を深く取材し、その場面設定や背景も細部に至るまで丁寧に描かれています。

例えば、この世とあの世を繋ぐ黄金に輝く橋は、「死者の日」に先祖を招くために蒔かれるマリゴールドの花びらで表現されます。また、ミゲルの住む町は、どこかノスタルジックで夕暮れが似合う小さな町として設定される一方、彼が迷い込んだ「死者の国」は、マヤ文明から現代までの高層建築が林立する「巨大都市」として描かれます。

「死者の日」に爆竹を鳴らして祝う都市の喧騒と、静かに祖先の霊を迎える地方の対比は、映画では「死者の国」と「現世」に置き換えて表現されていました。

「死者の日」に関して、メキシコでは近年、「北」から国境を越えて入ってきた「ハロウィン」のイベントが定着しつつあるそうです。

10月31日にはハロウィンと「死者の日」が一体となり、先祖を慕う本来の意識が希薄になることが懸念されています。アメリカからの脅威は、何も大統領ばかりではないようです。ただ、「死者の日」に爆竹を振り付けられ、街頭に吊るされ、燃やされる人形のモデルとして現在のアメリカ大統領は、抜群の人気があるそうです。

この映画には唯一現存した人物として、メキシコの女性画家フリーダ・カーロ(1907-1954)が登場します。メキシコ美術のコレクションを誇り、国内で唯一フリーダ・カーロの作品を所蔵する名古屋美術館では、新年度の常設展に於いて、「ガイコツたちの饗宴ーボサダの芸術」と題して、ホセ・ガダルペ・ボサダ(1852-1913)の版画作品を紹介いたします。勿論、フリーダ・カーロ《死の仮面を被った少女》も展示いたします。映画『リメンバー・ミー』を見た後にご覧いただくと、作品の理解もより深まるものと思えます。[J.T.]

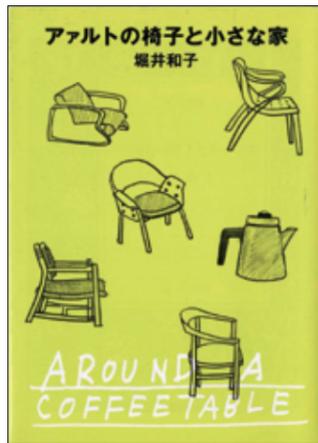


©2018 Disney/Pixar. All Rights Reserved.

BOOK

『アアルトの椅子と小さな家』

(堀井和子著 河出書房新社 2013年)



著者の堀井和子さんは、上智大学フランス語学科卒業後、料理スタイリストになり、その後、暮らしのこと、食のなどを軽妙に綴ったエッセイでも知られるようになる。この本も、北欧・フィンランドの建築家アルヴァ・アアルトの名前をタイトルに入れ、表紙にも彼の椅子のイラストが描かれているものの、内容はアアルトのことばかりではな

【編集後記】

長く、寒い冬が終わり、ようやく暖かくなってきました。最近、我が家ではAI化が進んでいます。照明やテレビ、ラジオ、エアコンなどをネットにつなげて、AIスピーカーに作動させるようにしてみたら、「照明をつけて」というだけで、電気がつくのでなんだか魔法使いになった気分です。たった数千円の機械でこんなに変わるのかと最近のテクノロジーの進化に驚きます。最近、少子高齢化や人口減少によるわたしたちの社会の将来の危機が叫ばれていますが、テクノロジーを導入しながら、社会の構造改革を進めて行けば、乗り切れるような気になってきました。年を取って動けなくなってもベッドにいながらヴァーチャル美術館で作品を楽しめるようになるかもしれません。我が家のAIスピーカーは導入したばかりで、今はまだ「ちょっとわかりません。もう少し勉強します。」と答えることも多いですが、少しずつ学習して進化していくようです。その進化を日々感じながら、ドラえもんみたいな家族(友だち)ロボットが家庭に入る日も意外に近いのかもしれないと思ひ、ワクワクしています。(hina)

アートバー第107号 発行日：2018年4月1日

発行 名古屋美術館
[芸術と科学の杜・白川公園内]
http://www.art-museum.city.nagoya.jp/
〒460-0008
名古屋市中区栄二丁目17番25号
地下鉄(伏見駅・大須観音駅・矢場町駅)下車
Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005
休館日：毎週月曜日(祝休日の場合は翌平日)
年末年始
開館時間：午前9時30分～午後5時
祝日を除く金曜日は午後8時まで
※入場は閉館の30分前まで

Nagoya City Art Museum